



# 大杉 奉代

経済成長も雇用も、地域の核は中小企業。  
中小企業の新事業開発戦略を研究する。

所 属 / 香川大学経済学部准教授  
経営システム学科  
専門分野 / 経営学



① 研究室の壁一面には国内外の経営に関する書物がずらりと並び、まるで図書館のよう。研究室で著書『中小企業経営入門』を手にする大杉准教授。  
② 大杉ゼミの卒業生が書いた論文の一部。面白そうなタイトルが並びます。「学生は、まず本を読んで知的好奇心を広げ、その中で興味関心のある分野を見つけ、理論で分析する力を身に付けていきます」と大杉准教授。

日本の企業の約99.7%は中小企業。香川だけでなく多くの地域では、中小企業がその地域の経済のパロメーターとなっています。中小企業が元気だと経済も発展し、雇用も生まれます。そんな中小企業が、もともとの事業を行いながら他の事業もスタートさせるという「事業の多角化」について研究しているのが、経済学部の大杉奉代准教授です。例えばどんな多角化の実例があるのでしょうか？「建設業が農業や福祉事業に進出したという話を聞いたことはありませんか？近年、公共事業が減って次の成長戦略を考えないといけなくなった際、自分たちの核となる技術や事業を活かしつつ、新たな分野に他企業とも連携しながら進出する例が増えています。最近よく言われる農工商連携もそのひとつですね」。大杉准教授は多角化を行っている中小企業に向き、企業家にインタビューしてその戦略を調査しています。「中小企業では事業の意思決定においてトップの力が大きいので、彼らがどのような考えで多角化を行っているのかを調べます。未来を見てリーダーシップを発揮するのは経営者にしかできない仕事。多角化に成功した企業は、経営者が独自の考えや理念を持っているからこそ成したのだと言えます」。

しかしそのような企業の変革には、社内

も戸惑いの声上がることも多いのでは…。「従業員全体でその変化を受け入れるには、ミドル層の意識が重要となります。彼らの

意識が変わると、会社全体が変わります。中小企業では人材は特に重要な経営資源。事業の多角化の中でミドル人材をどう生かす

かは「ミドル・アップ・ダウン・マネジメント」と言って面白いテーマなんです」と話します。

そんな大杉准教授のゼミは、学生自らが興味のあることを見つけ、現状分析や論文読解を通して深探りしながら、その人独自の理論的な分析を行うというもの。学内の他のゼミとも交流を図り、前期の終わりに、学生一人ひとりが何を学んだかを共同で発表する場を作っているそうです。「他の学生が何を研究しているかを見ることは、自分とは違う視点から学ぶ機会を持つということ。同じ物事をいくつかの視点で見るとは重要です。経営者も多角的視点を持つからこそ、社会の変化に敏感になり、決断できる方が多いのですから」と説明します。

研究者としての大杉准教授の視点も同様にユニーク。インタビュー中も「うまくいっている企業は失敗を糧にして次の事業を創造している」「多角化を行う中小企業にとって、事業を成功させることが目的ではない。自社の理想とする理念に向かう中で新規事業を行っている」など、ハツとする言葉が飛び出します。オリジナルかつ多様な視点で中小企業の戦略を見つめる大杉准教授の研究には、地域経済の次の成長戦略のヒントがあるに違いありません。

# 橋本 忠行

クライアントとの協働による、  
こころの理解と支援を目指して。

所

属/教育学部准教授

人間発達環境課程発達臨床コース

教育学部研究科学校臨床心理専攻

臨床心理士

研究テーマ/治療的アセスメントに関する実証的研究  
わが国への導入における課題と対応



臨床心理学は、「人間の心理的適応・健康や発達、自己実現を援助するための、心理学的人間理解と心理学的方法を、実践的かつ理論的に探究する心理学の領域」(野島、1995)です。近年、保健医療、教育、福祉、司法、産業など多くの場でその重要性が認識され、来年には初の「公認心理師」国家試験が予定されていることもあり、特に注目度が高まっています。

橋本准教授の専門は、その中でも比較的新しい「協働的/治療的アセスメント」。これはアメリカ・テキサス州オースティンのフィン博士が開発した、「こころの理解と支援をつなぐ実践的な方法」です。伝統的な心理アセスメントでは、クライアントの問題や資質について面接・観察・検査等を通し査定がなされますが、そこにセラピーの要素を融合し、中でも心理検査結果についての話し合いを重視しています。

『どうしてこんなに気分が落ち込んだらう?』『交際が長続きしないのは、私に何か問題があるからなんですか?』といった個人的な問いを、クライアントは抱えています。そういった問いについて、アセスメントを通して一緒に考えていきます」と橋本准教授。客員研究員として1年間滞在了した、オースティンの治療的アセスメントセンターでフィン博士から直接学んだことを、日本人

のパーソナリティや文化、そして臨床実践に適したものに調整するという重責を担うひとりで。

「抑うつ、不安といった情動、不登校や落ち着きのなさといった行動、そして職場内での対人関係など、表面的には症状や問題の



①大学院生が作った箱庭を見ながら、会話の中に質問を重ねて、気持ちを聞きだしていく橋本准教授。どんな言葉にも肯定的姿勢で、作った人のこころを受け止めるような会話が続きます。  
②フィン博士の著書「In Our Clients' Shoes」、自身の著書「アセスメントの心理学」、そして、編集委員も務める日本人間性心理学会の学会誌「人間性心理学研究」。

姿をまもって現れてきます。しかしながらその背後にある本質やテーマは本当に個別的で、それらを深く理解するために幅広い種類のパーソナリティ検査や知能検査を活用します。例えば大きな失敗をした時、私たちはどのように感じるでしょうか。穴があつたら入りたい、誰かのせいにしてみたい、あるいは頼れる人の側にいたい、と思うかもしれません。「恥」は日本人にとって重要な感情ですが、そこからの回復過程もそれぞれなんです。一人ひとりの違いを大切に、問いへの答えを共に探求します」

現在、事例研究として慢性疼痛、社会的引きこもり、子どもと家族のアセスメント等に取り組んでいます。またリサーチとしては、クライアントからの満足度評価や、質的データを基にしたクライアントと査定者の相互作用の分析を行っています。

新設される医学部臨床心理学科では、「心理アセスメント」「人格心理学」「人間心理学」等を担当予定。「どんな人に臨床心理学を学んでほしいですか?」の問いには、「他者のこころの痛みを想像することができ、優しさを持った人」と、すぐに答えが返ってくる人になることを、あなたも目指してみませんか?